

科目名	発達心理学				担当	多田 幸子		
形態	講義	単位数	2	開講時期	1年前期	実務経験		
必修	卒業：必修 幼免：必修 保育士：必修				ナンバリング	Y2101	DPとの関連	2
授業概要	心身と周囲の物的・人的環境との相互作用過程に生起する質的、量的変化に関する諸理論を学ぶことを通して、ひとの発達が呈する特徴、また、発達を促進しうる環境整備の手立てについて理解する。							
到達目標 学習成果	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 乳幼児期から成人期を中心にひとの発達において重要な諸現象について理解する</li> <li>2 認知、感情、社会性等のひとの発達の諸側面についての基本的な説明の枠組み（理論）を正しく理解し説明できるようになる</li> <li>3 発達を促す物的環境要因、人的環境要因に関心を持ち、どのように構成、再構成しうるか考える</li> </ol>							
授業計画	回	内容						
	1	発達と学習：その概念とさまざまな説明モデル						
	2	身体・運動機能の成熟と感覚・知覚：乳幼児期から青年期にかけての変化						
	3	身体・運動機能の成熟と感覚・知覚：成人期から高齢期にかけての変化						
	4	意図を理解する力、意図を共有する力、他者の意図に基づいて行動する力						
	5	表象の発生（1）：乳幼児期、児童期、青年期以降の「概念」						
	6	表象の発生（2）：乳幼児期、児童期、青年期、成人期以降の「ことば」						
	7	表象の発生（3）：乳幼児期、児童期、青年期以降の「数」						
	8	表象の発生（4）：乳幼児期、児童期、青年期以降の「時間」						
	9	思考（1）：幼児期における素朴理論の獲得						
	10	思考（2）：心の理論の獲得						
	11	衝動と自己制御（1）：幼児期、児童期、青年期以降の感情の育ち						
	12	衝動と自己制御（2）：幼児期、児童期、青年期以降の実行機能						
	13	青年期から成人期にかけての発達：学ぶ、働く、育てる、社会的役割を担う						
	14	成人期から高齢期にかけての発達：学ぶ、働く、育てる、社会的役割を担う、総括する						
15	発達の心理学史							
評価基準	講義・演習で取り扱った発達心理学的概念、発達理論を正しく理解し、説明できる。また発達の諸現象に興味と関心を寄せ、自ら発展的に学ぼうとする態度を形成する。							
評価方法	期末試験 80% / ミニレポート 10% / 発問への応答等の授業への参加度 10%							
フィードバック 方法	再提出を求める提出物は、授業内で示す期日までに添削し、返却する。授業時のパフォーマンスに対しては基本的にその時間内または次週冒頭に講評を伝える。試験スコアは問い合わせがあれば個別対応する。（時期によっては伝えるまでしばらく時間を要する）							
アクティブ ラーニング	各授業回冒頭で個別、少人数で導入ワーク（認知課題、簡単な身体運動課題など）を実施する。							
教科書	各回で必要な追加の資料があれば講師が準備、配布する							
参考書	例として『加藤義信（編）. 2008. 資料でわかる認知発達心理学入門. 東京：ひとなる書房.』 『Siegal, M. 2010 外山紀子（訳）子どもの知性と大人の誤解：子どもが本当に知っていること 新曜社』							
履修条件	こどもの発達と保育に関する他科目での学びと関連付けながら受講し、発展的な学習につなげていくこと							
授業外学習	授業内で紹介する文献の講読、視聴覚教材の鑑賞、読後・視聴後の議論を積極的に行うこと							
オフィスアワー	学生支援課の掲示板に掲示する							